

詩歌
連能

異名分類抄

乾
押

13

645

1



43
645

イヒシラフ

ヲサナシ

メツラシギ

とて月をそ
る。若くは
うけふなり。

より一孝王美らに耳ひす。

のさかしくいふこと、おそれ
乃のまゝ一島をいふこと、おそれ
器のまゝ、商のまゝ、産のまゝ、
ふくまひ、いふこと、
はの川を、おそれ、
のまゝ、いふこと、

あゝ、いふこと、
いふこと、
いふこと、

浪速の父

一
いさねお。澤山と云ふ。其名同はうと云ふ。て。流る。院
久松と云ふ。ものあり。ふ。松。う。は。ん。わ。ら。う。の。い。の。付。く。幼。学
の。き。う。わ。と。す。并。ふ。右。人。れ。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
もの。き。う。わ。と。す。并。ふ。右。人。れ。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
は。な。れ。と。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
て。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
ら。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
を。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。
て。あ。は。れ。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。中。に。其。名。を。し。め。し。

[illegible]

△天部

2

月ツ

十五夜ヤイ後月ゴツキ

十六日

十七日

十八日

十九日

蝕

明星

夕星

牽牛

北
斗

流星

熒惑

風

東風

坤
風

乾
屈

名驥
風

松風

雨

大雨

レ 五

震

廢

露

霜

雪

散

雷

和

虫

述
祭

東
西
南
北

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page is bound, and the overall tone is a warm, off-white or light beige.

夏主神

織女

冬朝

夜

三月十九

七月 庄二

十一月

春之主神

夏朝

秋朝アカツキ十六

曉

昨日

四月

十二月廿五

春朝ハルノアサ

秋

冬

朝
十七

正月十八

五月二十

九月廿三

夏十四

秋主神

冬主神

全

二月

六月

異名分類鈔

天

喜撰式石見式
△天
いもやの

久方れいも覺めさせともあきなくに折るゝ吹雪く秋をいづ

どP
ねみち
於まゝあり

何れを以て之と云ふ
 う船のてゆふハ能くも

張撰以爲

素より、ふもそのなれとあるとるゆゑしも

あさひこ
ふね
あさひこのさやまのぼろのさやま

らぬ事もさうな
みまのにはま
かたのけさ
いふ

玉照

○天ハ十蔭 推古紀歌云夜須弥志斯和我於朋者
弥能詞句理麻須阿麻能椰蘆訶磬云厚顔抄云
日影をみながらという

○やたがらす 和名鈔云陽鳥歷天記云日中有三
鳥赤色今案文選謂之陽鳥日本紀謂之小咫

鳥田氏私記云夜太加良須

喜標 子見
いみかけ
あまひこ

月

さ、らえをそこ 美事集并六のそらそらそら
月影をみながらという 月影をみながらという 月影をみながらという
も自注云右一首

歌或云月之別名曰佐散良衣壮子神中お月影
名をのこいていふをさそらるる男といふ我を指せ久美沖
沙云無と清浄の義訓ゆきお神さるる等といふく月ふ古
語拾遺云阿那佐夜憩 竹葉天武紀一男を
こハ神代卷可愛男れ義をさそらと云ふを切るよむ
潔良壮子能さるる月よみさそらと月吉壮子能さるる月
ふ

つよみをそこ 万葉集并六のそらそらそら
ひいせんいふはなうといはよきよこそ
つよみをそこ 旧集并六のそらそらそらと又の川
無とさるる月人をさそら

かつらをとこ同か

狭衣よりつるきこもがなうらゝあまれ

と見えなむといふ

喜撰石見秘藏抄花玉抄

土

秘藏あり朝教へきふふふふめえくうE

事はいふまでもなく
土の

五
ら
や
ゆ
こ

力多筆之「ありのけろふをえん、上」

是間人宿弥大浦初月

歌也

つらねを

詞林採葉云。魚名苑曰。月中桂長。

二百五十丈。月輪內有之。下有河。此木秋花開云。

歌
昭
云
月
の
桂
を
慕
は
ぬ
秋
の
樂
を
と
も
に
言
詩
桂
花

秋白と作れ秋花咲と云ふうと空あつて云月夜の花

言はくよくて秋をうとと強一変極めふと八月に名なすと云

十五夜已後能月

○もちくたち
あそびハミナミヨリ
おもてたて

十六日

いさよひ

いそおといさよひの力ハ十六日ハ是日氏の言也

とまゝに案末摘花を云へるつゝもと大内から却てうけ入るるを

ぬいさふのたこをからしはきりといふいのたをうへ

ほんにちうとうと
但しこゝろはいさふい
たふやうなる

いづれか力結んてふのもうやもうぬまふつしなれ

七十七の力をいさふ舟とらふ一みまな戦ふる云月のうゑ

[illegible]

三八

因之

たちよち

ちよち 新機六帖 八門をさへわきまひて寐るものこ
さそと之縁の内に居るもの

十八

ね^に
もち

中ち 萬葉第十之「白浪をいふ」めうくく一居たありし
 のとよそて上下畧

十九日

ねふ
ま
ら

[illegible]

ハ十九日勿論又再案ニ續き、上是則、如て待し廿日能なる
まづうゝとあひさしといひけつわまれどとあり。是ハ古々集能
老より云ふ十六方仙の一人ともいふれし人のかゝるまじきこれハ前證
多しといふも推して、而論十九日サレた後と思ふへー又六作は
二人をのぞきさうし能なることをやちうもうに名取をせよ。
梁沖海ハ述ふによらず十日は残居すらといひ廿日残廢すらと
いはさ同かれハ十九日を起し終といふれともいふなり

明星

あうほくと名を記。万石を著す。あうほとの所を著すにいと多く
帖へかゝるやうに見えり。いふよりあうほと能くかぬらうに出てお

秘蔵
たれときほし

かゝるに
たれはし

かゝるに
たれはし

まはるゝとてすをいふ。時のさはきりしゆのそしたまひ
すをといふに。

夕星

和名鈔云。太白星一名長庚。暮見_ニ於_ル西

方為長庚由不方十中つともわうあふ地のはつとやとよ
あう、六帖二日はうきうきうのそふゆつ、けけい、いんきん

牽牛

○いぬかひはさ 和名鈔云牽牛一名河鼓 比古保之又
如加比保之

かそつばみ 一景色系より見ゆけは名和名鈔より
渭河鼓は系なり

北斗

な、い、す、ほ、さ 七在星なりまききりけいふふふなる
やうき、の、は、人のおうひをえよきなり なつのは

流星

よばひはし 和名鈔云流星一名奔星 与ハ比
保之
も、あ、い、う、や、う、い、き、み、う、け、う、い、け、う、き、で、出、て
ひ、う、き、う、け、

彗惑

ひなつはし 彗惑よりきうとまきとまき平氏太
子傳曰敏達天皇九年六月有人入奏曰有土師連
八島唱歌絶世夜有人来相和歌音聲非常八
島異之追尋到住吉濱天曉入海者太子侍側奏
曰斯彗惑星也天皇大驚問之太子答曰天有五

志馬

貞徳云志馬さハ風の名なり志馬さといふと

いひく風なるなり志馬さといふは風の風なるなり
我のふき堀川流るる波なるなりこゝをわたりて

わたりてやれり

ハて由抄云海神なる風なるなりハ

今俗にやてといふと千通言ふ本意をなすハ波なる
川のなやてやれり生田の傳より

志馬なるせ

神代卷曰伊弉諾尊曰我所生之

國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撻之氣化為神号
曰波長戸邊命是風神也伴の神なるなり

ハ風なるに悪風吹たりし志馬の風の乾方より

吹風なるといふ中臣被云科戸乃風乃天乃ハ重

雲乎吹放津事乃如久云源氏朝臣云あまの風を吹

もちり

みこころ

風の名なるなりハ風の名なるなりハ風の名なるなり

も波の名なりやあまの風なるなりハ風の名なるなり
も波の名なりやあまの風なるなりハ風の名なるなり

小風

とて「とてかやハ人知るまじき」はの「ハハハ」の「ハハハ」
とて「とてかやハ人知るまじき」はの「ハハハ」の「ハハハ」
とて「とてかやハ人知るまじき」はの「ハハハ」の「ハハハ」
とて「とてかやハ人知るまじき」はの「ハハハ」の「ハハハ」

雲

あゆむのせ

「万葉十七」あゆむのせいさく吹り「なとの海士」

はうそくをよひのこさうふゆ自注云越俗東風謂之安
由乃可是也

たよのせ

古今「古風」さうふゆむむふふ「おむはばやま」

そのはま詩曰習谷風以陰以雨注ハ習ハ和舒也

東風謂之谷風

亦雅曰東風謂之谷風云

坤風

ひかた

万葉七「あふさくひさくふさく」さくさくをい

みなとよはさくはさくあささかお辰己の風といふ今顔

後さくさく

乾風

あなま

「万葉十七」あなま「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

さくさくはさくさく「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

さくさくはさくさく「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

さくさくはさくさく「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

さくさくはさくさく「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

さくさくはさくさく「あなま」はの「ハハハ」の「ハハハ」

君と臣已より事いふ里人能いひをきく。なまへ〜こゝ思案よ
あなり、八方角よりさう〜ん。又穴師らの風といふんという。あなり
はい、あ〜さ〜れりてわ〜。能轉流らとな同教通をあるまで
たなどいふつことせ。あまめ〜といふごと〜。堀に次す百そい。
おのこのあ〜ひとなま〜をわたり〜。おのとよえうお母さん山城で。
續合せあり

翼風

を^はと^はや^はを^は

松風

凍草
明世より山能きうくたすゆなり
とふ
ふれきの風能
又ふれきの凍草より能くたすゆなり
とふ
ふれきの風能

雨

[illegible]

たつみ
語未効和名鈔に療豆美亦八太
雨水也とあり

是よりよく
継體紀より
遼より
イザナミツ

ちぢなえ
色紙和紙 2. 雨とちうなるといふ

○あやつみづ 万葉集第二 大子のみそなたかきわまのぶあふ
まてまつしといせとんまうらなう

大雨

○ひさめ 垂仁紀・復^{フタ}大^{ヒサメ}雨^メ從^リ狹^サ穗^ホ發^{アリ}而^リ來^{キテ}、万二長

一

雲

17

秘

2

三

主あひね

あ

土

3.

主

A circular stamp or seal, possibly a library or collection mark, located at the bottom center of the page. It appears to be a dark ink or wax seal with some illegible text or a logo inside.

2

い

露

霜

雪

日 結ゆけふ かえ

日 夜のよ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

日 結ゆけふ かえ

にの言はけふもれはうていーたのまおわん

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

ささいこめ すさいこめ

雷

霰

はのあそびをわきてる

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

いみさらす

出。出。辨也。云々。の花といふけ義

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

たよとな 兼載篠月集よ「思ひなせをほらぬかき

万葉十二かゝり事此いふ所みそとよきなり。 露

憲とちう。見あなうといふ所ちがわといふ

秘藏

かゝる

○いなるし 和名鉄山一云伊奈豆流比之嚴出
火なりといふと案よいなのため鉄山は稲のこゝろ山鉄
能細くさうみうも鉄いふとあれども是も細くさうも鉄
と云ふ

〇
カ
し

○のし 万葉十四いうはらむやとあのかてよたつめ乃と
○のす 同きふね川の川原もきくはくくわうなるとよあ
ふとよとよあふとふとふとふとの勢流し

○をふさ

ふさ まふ糸に九文の幣を糸に縫ひし時うらうらと虹の立
たれと西り上人のまじりてうらうらとわきまうらうらと
まふまかきぬうらうらと虹の立をうらうらと虹をうらうらと
うらうらと

万九千九百九十九

契沖海云

陽カケヒシ冷蜻蛉と同訓。万笄十^ハを^ハあ^ハる^ハゝ^ハ寫^ハる^ハ

名をも晴久にきゆるをうとせうしものをも供に所傳
かあうふいなるるをうとせう

○いのたてひれぬこ 日の経ハ東西なり。日経ハ東
北、方一、又青香具山ハ日経緯の○ハ青香具山ハ
日経緯のとよみなり。成務紀云、以東西為日、経南北
為日、横トミ、

△時節

春

春主神

春主神 春主神 春主神

ハミミ云、春の名なり、奥義抄同

さほひめ 春主神ハミミ云、春の名なり、奥義抄同

春を降る神といふ

春朝

秘藏抄 藤原 藤原

秘藏抄 藤原 藤原

夏

夏 夏 夏 夏

ハミミ云、夏の名なり

○おめト 神中おさくもさき注云、おさくトハ夏也

名なり云し

夏主神

夏主神 夏主神 夏主神

うつたひめ 藤原抄云、おさくトハ夏也

ハミミ云、おさくトハ夏也

夏朝

うつゝいめ

意多おとん

秘蔵

つなり

意多集同秘蔵おとん

秋

あさき

いささの

多霧のふれ

あさき

秋主神

たけしめ

意多おとん

穢女

帯

さかひめ

意多

百子姫

袖のふりめ

穢姫

握紫いめ

横姫

七夕おとん姫とて宗祇所より説く

おとん姫ハ圓梳活法引開え遺事云ハ蜘蛛納之

小金盒中至曉開視蜘蛛絲稀密以爲得巧之多

少きものは手おとん姫蜘蛛とてさやあなをくを

はくあなをくをくをくをくをくをくをくをくをくを

おとんいかなうとて所事なうとてさやあなをくを

意多姫ハ公事根原とて巧真とて机の上より火とて

おとんおとんおとん事文類聚云女郎呈巧焚香列拜

百子姫ハ歳華紀麗注云七月七日臨百子池作樂

宗祇云大國の禁中ハ百子池おとんおとんおとん

二月

「くもねんねむとふと書けその名なりやあ初力
 むつはな力
 「くもみえ初力れ初日氣乃とくさくやあふえゆむ
 初力
 子日力

秘龍
 むめつさ力

「くもみえのなふね里初力とあくたさうつな初力
 吳傳
 ゆさ、え力

「くも越て春もふもふもふの根初お清力のくもふもふ
 初
 むえづ力

「くもねんねむとふと書けその名なりやあ初力
 秘龍
 むめみ力

「くもみえのなふね里初力とあくたさうつな初力
 日
 をくさおひ力

「くもみえのなふね里初力とあくたさうつな初力
 初力
 一月力
 一景を春お額田初きくもか初里力人とも

三月

秘龍
 さえなさ力
 「くもみえのなふね里初力とあくたさうつな初力
 吳傳
 むなつ力

日 夕月
日 夕月
日 夕月
夕月

こよ一景系紫系上我を記さるる

五月

秘蔵
夕月

「池をたづねてゆくやうにのちをたづねてゆくやうに」
夕月

「夕月をたづねてゆくやうに」
夕月

「夕月をたづねてゆくやうに」
夕月

夕月
夕月

「夕月をたづねてゆくやうに」
夕月

「夕月をたづねてゆくやうに」
夕月

夕月
夕月

六月

秘蔵
夕月

「夕月をたづねてゆくやうに」
夕月

まづいづれ月

「風吹く地をなぐる風いつなる涼氣力結る人よそをさす
おつめ月

「さきさき雨うらのくさうハおね月のゆふれそふれ
あせよち月

「おのちのま居を一つくまけや風体力結る乃うた
なうかこ月

「夏雨をねれやそそ雷結力もなうぬるやさうさ
こなつ月

「ちうけいぬ妹よつんさむさふぬかやそそそまのさ
せこの月

七月

秘蔵
めてあひ月

「たなごのめくあひ月ねくといふにころれさうーか
なうよ月

「ひさけのくやあさ七夜月なうたえ乃よんれ
あささ月

「風なう何そいそむねち秋の初力をあせさうー
ふこひらさ月

おやーれかね

材鐘 六月律也。呂氏春秋注曰。林

衆鐘聚陰律也。陽氣衰陰氣起萬物聚而成竹管
之音應林鐘也。

秘蔵
いろどる月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

十月

秘中
こずあはあき 類書纂要抄秋九月也。抄末也。

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

秘中
たこさう月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

「いろどる月」なる月ふなりおきいよし哉さくせん哉さくせん
そけ
さくさくさく月

十一月

「そのいふも初雲かたはちてはしきまをえもふとくをたきこふ」

はゆこをたきこふ

「^{莫傳}「^後さうはる力乃を強なうむきいれ雪けよそなうやうく」
ゆこまらち月

「^カ風を雪結なといひなう」おとそーとてふめさう哉
みさ月

「^{最玉}「^玉方ふかうて非強の神な力あふれいさやめのとやゆん
ふとふ月」

「^カ風さむと雲は月たふさうやまけいふさてふとをわらひ
ぐら月

十二月

「^ゆ「^カささてふものまかた非集力いふとこととをたきのさやん
さこ月」

「^カさうはるをたきさうよまえ月をたててそのさうさくれ

としよつた

「^漢「^カはるよとーとつたいふかたおさうひてふとやまのうこを
さ月」
「^カさうはるやあうん」

「^カのさなはるやとさうんたはるさうかこの月たさうなうつ
やこ月

「^カさ人たさうさやたさる親子月たやいのちれたさうなうん
ささち月

「月」をてゆくといふ事、さう老なれと表す月はいそいでる
めとつ月

「月」をてゆくといふ事、さう老なれと表す月はいそいでる
めとつ月

「月」をてゆくといふ事、さう老なれと表す月はいそいでる
めとつ月

「月」をてゆくといふ事、さう老なれと表す月はいそいでる
めとつ月

異名分類録卷之二 目錄

△地部

日本一	肥前 ^三	九州 ^三	備前 ^三
長門 ^三	新羅 ^四	加賀 ^四	田舎 ^四
百濟 ^四	冥途 ^四	高麗 ^四	世界 ^四
紗羅林 ^四	地震 ^五	三途川 ^五	極樂 ^五
地 ^五	春日山 ^六	山 ^五	須弥山 ^六
不二山 ^六	加茂山 ^七	多武峯 ^六	松浦山 ^七
日光山 ^七	峯 ^八	鞍馬山 ^七	三輪山 ^七
山ノ端 ^八	島 ^八	谷 ^八	谷水 ^八
巖 ^八		磯 ^八	高岸 ^八

龍リウ八

海カイ十

山崎川ヤマザキカハ十

波ハ土

度タ土

畠ハタケ土

湖ミヅウミ八

川カハ十

角田川ツノジカハ十

泥ドロ土

橋ハシ土

石イシ土

△神祇カミ土

地神チカミ土

水神ミヅカミ土

道神ミチカミ土

水ミヅ八

紙屋川カミヤカハ十

名古曾園ナゴソヅノ土

溝ミヅ土

野ノ土

破ヤブ土

氷ヒ九

八幡川ハチマタカハ十

廣澤池ヒロサワヰ土

堰イヰ土

道ミチ土

天神テンカミ土

海神ウミカミ土

道祖神ミチノハジカミ土

形代カタシロ土

△人倫ヒトノリ土

春宮ハルミヤ土

大臣オウシ土

中將ナカサマ土

大夫オウシ土

左右衛門サウエイモン土

番匠バンシヤウ土

前夫サキノウコト土

後妻サチメ土

兄弟ケイテイ土

從イトコ土

親王シンノウ土

公卿クウシヤウ土

三位サンイ土

隼人ハヤヒト土

侍從サマヘ土

男オトコ土

後夫サチメ土

妻メケ土

嫡子チヤクシ土

姑シヤクシ土

中宮ナカミヤ土

民タタ土

四位シイイ土

左右近衛中將サウエイミナトナカサマ土

民タタ土

女メ土

妻メケ土

夫ウサ土

仲子ナカコ土

親族シンゾク土

仙洞センドウ土

后キタキ土

宰相サイシヤウ土

六位ロクイ土

左右衛門サウエイモン土

百姓ヒヤクシヤウ土

夫ウサ土

前妻サキノメ土

我ワ土

孫ミナ土

老人 カニ

俗 カニ

海人 カニ

圉人 カニ

婢 カニ

乞兒 カニ

古人異名 カニ

佛 カニ

命 カニ

腕 カニ

月水 カニ

老女 カニ

山伏 カニ

漁翁 カニ

屠兒 カニ

傀儡 カニ

童 カニ

仙人 カニ

相撲 カニ

乳母 カニ

遊女 カニ

僧 カニ

盜人 カニ

獵師 カニ

奴僕 カニ

流人 カニ

心 カニ

髮 カニ

臍 カニ

淚 カニ

思 カニ

小腹 カニ

跣 カニ

病 カニ

息 カニ

指 カニ

躡 カニ

家 カニ

脚氣 カニ

飼面 カニ

疱瘡 カニ

夢 カニ

腋下 カニ

黒子 カニ

痘痕 カニ

玉莖 カニ

疔 カニ

癰 カニ

吐乳 カニ

吉舌 カニ

癰 カニ

疹 カニ

灸 カニ

死 カニ

男名分類鈔

△地

日本

豊秋津洲

神代卷よりへたり而神武紀ニ云

廻望國狀曰猶如蜻蛉之醫帖焉由此始有秋津洲

之号也云云 夫木集 為家 秋つゝ人知るる所種と

云々云々なる所へ 雄略天皇御歌云

阿岐豆斯麻野麻登と云へ其外葉葉と云々

とあり 夫木集 為家 秋つゝ人知るる所種と

しておる云々云々云々云々云々 又秋津國とも

あるへ 為相御 崎の所なり云々云々云々 秋津國

と道にる者云々云々云々云々

あしきれみちの國 古史記豊葦原千五百秋水穗
之地とて入る 萬葉集よ あしきれみちの
國とよあり 日本紀竟宴歌

りいふ秋の國をさるるを論をのこ方代今もとれや
浦安國 神武紀よとへたり 夫木集よ

波まうて海をさるるをさるるを名をりて浦安と
細戈千足國 是も神武紀よとへ

礮輪上秀真國 同紀より
玉垣内國 是も同く夫木集よ

日本
別垣のうちつ所國に於てとて名をりて浦安と
はしきれみちの國 神代卷よ葦原中ノ國とて

夫木集よ
よかけておる六人一葦原中つあつたうとて

やふ國 神代卷よ 大八州國よ 日本紀竟宴歌

同をさるるをさるるを名をりて浦安と
はしきれみちの國 神代卷よ

志記ふの國 崇神天皇遷都於大和城上郡磯城

しよりさるるをさるるを名をりて浦安と
はしきれみちの國 神代卷よ

万九 おおさるるをさるるを名をりて浦安と
はしきれみちの國 神代卷よ

やとくよ 中臣後云 豊津葦原の水穗に國平安國
ひなちの國
いはるはしたうこの玉 現存六帖よ いはるはしたうこの玉

かといの歌末をハ神やてうえん

あめはちかある國 万北にるをちのかとめいあをち方
と一はねいとあり

神國 神功紀云東有^ニ神國 謂^フ日本云^ハ夫木

神玉とやふはーと城さあめあう君のまうとハかきん
たのよや

そく^同やるやのま 万第一雄畧天皇御製

そく^同やるやのまおーなうわきこうをじき

又そく^同とほろもいふべー 日本記竟宴歌

そく^同やるやのまいさうのくーハき 是ハそく^同

とむいひやるとハいそ

○玉鉾道河^{タマボウミチカハ}流國 續古今集 太上天皇

久くはあふちるも玉鉾のちあふあそ今れふハ

○秋津羽^{アキツハ}れ姿の國 續後撰集

秋津羽のそく^同れ國とれれハ神のまそやふあ

○藤根^{フジネ}れ國 言塵集よりゆ

○内木^{ウキ}綿^{ワタ}之^ノ真^{マコト}進^{マシム}國 神代紀よりゆ

初^{ハツメ}國 秘中抄

ゆき^同れ玉日

ちり^同れ玉日

大和 ○うひ子^{ウヒコ}れ國 性靈集益田池碑之銘云^ニ粵^{ウツ}有^ハ益

田池^{タチ}兩^{リウ}尊^{ソン}鼻^ビ子^シ之^ノ州^{シュ}八^{ハチ}鳥^{カス}初^{ハツ}導^{ドウ}之^ノ國^ニ注^ス云^ハ初

九州

産之州大和國也

○秘中 往く此國 往く香の崎といふ

釈日本紀曰筑紫洲此地形如木兔之跡故名之木兔鳥之名此云都久

倫前

○吉備 前中後且三國古名吉備といふ古史記曰史記日本紀等云和名欽備前キヒノミナ備中キヒノナカ備後キヒノノチ

長門

○穴門 垂仁紀穴門古史記穴門天智紀始長門といふ

肥前

○火國 前後本為二國景行記云十八年夏五月從葦北發船到火國於是日没也夜冥不知著岸遙見火光天皇詔按抄者直指火處因指火往之即得

著岸天皇問其火光處曰何謂也也國人對曰是八代縣豐村亦尋其火是誰人之火也然不得主茲知非人火故名其國曰火國云々火のほろとつゝも是なり是等たぐひはとつゝもあはれとつゝもさふとつゝも

加賀

○よろこびみくも 散木集ふ加賀守殿補國へ下りたることよろこびみくもはへといそく遠あれとへといそくやめさう

田舎

再撰 いまの世 堀川院次良百首 いまの世やそやもれ小田よたつ鴨のかくもぬとろひつちせひら

百濟

くたは 日本紀訓也神功紀云々

新羅

^{ハミ} ちうん 仲哀紀^ニ 崇神紀^ニ 鶏林^ニ ともあり

高麗

^ロ こま 神功紀^ニ あり

世界

くねした海 金葉集^ニ あり 佛とやまふまは

かちとやうねした海を漕ぎぬらん

沙羅林

^ロ 樹の林 佛滅所^ニ あり 釈尊涅槃^ニ 入ふと記其

樹即時^ニ 變じて白く白鶴のこと^ニ あり

冥途

^ロ こねほのよ

^ロ ちちういつ

^ロ よしつ国 神代卷^ニ 黄泉^{ヨモツクニ}

^ロ ちひのこ 万十六 いさゝかのちひのこ^ニ あり

ちひのこは志^ニ あり 契沖抄^ニ 云 生死

ちちういつ^ニ あり 此岸とて涅槃^ニ あり 別有とて

とも四聖城彼岸^ニ して其間を海^ニ あり ちちういつ

して底なく廣^ニ あり ちちういつ^ニ あり 生死あり 海

ちちういつ^ニ あり ちちういつ^ニ あり 潮の葉

ちちういつ^ニ あり ちちういつ^ニ あり 是彼岸あり

○よも 糸糸集^ニ 第九を^ニ 國黄泉^{ヨモツクニ} あり

ちちういつ^ニ あり 今俗あり ちちういつ^ニ あり

三途川

○ちちういつ^ニ あり 大和物語^ニ あり ちちういつ^ニ あり

ちちういつ^ニ あり ちちういつ^ニ あり

注云 ちちういつ^ニ あり 三途川あり

○くさく川 古今

極樂

はるる雨とあつた川あふれふたふた
とて道 源氏推く本の巻よそふとあふれふた
あつちのそをけとあやせとてあふれふたふた
あひねへさふた

地

志すね ^{志撰} ハ雲云云云の 能因日

地震

なへる 推古紀云七年夏四月乙未朔辛酉地震全
屋悉破則令四方俾祭地震神云地震の神
とて右成へ

山

はま
たうさこ

播戸み高破入混とていふとつたふた
ま砂といふ砂積成山といふ本文よりいふといふ

後撰集よ素性法師のたてていふ歌よ

山守いといふとんさふた尾上のさう折るかさん

是よりさうへ

むき ハ雲云日本紀よやすむきといふと 山

むきとよむ 神功紀欽明紀等よりいふ

こやのさう道 ハ雲云山たうけふ云一説未弁云

積弥山

○そめいれ山 新譯獲迷廬山云拾玉集云折 そめ

いられ山の田あよ田能國なり其中うを南膳部州と

と佛の出のふ國あり云雪玉集よ

司あひいふとやハ人たえんはあのとあれとあいろのこ

富士

和名
藤嶽

鳴澤高根

常盤山

塵山

二十山

三重山

新山 見出山 三上山 神路山^上

羽衣山 四季なる山 東山^東 なまけ山

未通女子山 たけやう山

鳥子山 國が溪山^上

春日山^{春日} 若草山 植物よりなる 春日あけをといふ

和州幽考より若草山を俗にほくらさうといふ三葉の
花より並べると可考曾丹集より

春日山といふ山よりなることこれより相考するなり

多武峯^多 紅葉洞 玉葉集より 月夜に紅葉のいろをくへて

花洞の月夜なるをよ けふ素意はゆいすい

一花のまきし時分川の観音小法師の聲よりやと

さきもはつていほきれまうとてを流しいほくふてう佛

法修行して往けぬやけさへるへきとわやけさ

肉陳よりかくきえしあひなれとあん

かきえのいづくやもきえをきえの洞より考用へ

松浦山^松 領巾^上 萬葉第五 といふ人よりさききえ

こひよひきえうしうおへるの各々同きよおと

きく同きといふことを依用ぬひきえうきとあき

こよほしはあき合考ふ松浦の山ひきえう

といふへ

日光山^日 性靈集云 粵右同州補陀洛山^上

注曰旧名二荒山改日光吳音相近也又云補

陀洛和語相近也 云々フタアラ

加茂 ○神山といふ 狹衣二

神山に止ひ葉かくききのへうゆふさるからけりきのう

鞍馬山 ○くらゐの は鞍馬山にけりぬ山といふ事ハうつ不物

語忠古曾引卷春日詣りてきよへまう予別記委

三輪山 ○こむろの山は三輪山にみむろ山といふ事名所補遺

抄みくはし事長ききり畧と其書に被てきり

将之高市郡ふるこむろ山にうさきか雷に岳と云

事ハ雄畧紀よりぬ

○神垣山 後撰集八

又早振神垣山のふみきりきりきりきりきりきりきり

古今よ 神垣にきりきり乃の柿葉ハ神にきりきりきり

ひらり 是神にきりきりきりきり

山端

秘蔵

おるきり

秘蔵抄よきりきりきりきりきりきり

又西の月入るきりきりきりきりきりきりきり

おもきりきりきりきりきりきりきりきりきり

峯

秘蔵

さちきり

あろきり

はくきり

やたきり

たけきり

さいきりきりきりきりきりきり

谷

秘蔵

いさきり

秘蔵抄云 人九

又のきりきりきりきりきりきりきりきりきり

谷水

○たきり 仙覺抄云谷にハ谷水あり水を物とて

島 巖

あまのふき 万々長蛇の 月日のまじりて天雲の
むふと蛇をたよる蛇

日よそねーは 石見ハ雪あまー

日ま川ねひ

日ま川ね

日ひこひー 俊頼叔

日あろふと

日あろそね

日あろいと

日あろーま

日あろま

礮 高岸 龍 湖 水

○そりひ 景行紀ニ冷水がサムキと云ふ 龍馬

こりるまといふ

○をりや 赤澤ま 小蛇をよめいふ

まろ蛇行まるといふハひやあまをよめいふ

へまろといふ 蛇中れまといふ

よまゆか人おろまー 今俗上人おろま

て水もとまぬまゆまといふも是等蛇送

はまー

○野守れ鏡 野中ら有る水鏡いふ 神中叔云むー

雄略天皇と申帝狩ーぬひら蛇ノ所鷹それてこ

と野守れ鏡て水鏡なるノ所鷹それてこ

てかくまうハヤそとせせぬひらまハは蛇の水に

八幡川○なごり川

行乗の古今圖書序に八幡川河派

川といふとらう八幡川とて今所謂放生川ある

山崎川○たご川といふ

重之集に山崎川河なご川といふ

なごり川といふ

上はのたご川河より後くやれと申す

角田川○あさ川

更汲日記にささ川の才のた

ささ川といふ在五中將れいささ川といふ

ささ川といふ中將れいささ川といふ

の山野河海うやれたといふも有る

を流くささ川といふ梅豆羅河松

浦といふ古名はあさ川といふ

なごり川

○よりなごり川河はなごり川といふ

いうよあもいふなる人それなごり川といふ

ふよあもいふなる人それなごり川といふ

廣澤池

○大沢といふ大沢は古名なり大和物語に監命婦

大沢の池の水くはるぬもいふ

秘蔵

奥義

ゆき川

なごり川 大波は註八風の下より

泥

○ひちり

和名鉄土和水也

和名比知利古

○こひち

源氏に

神ありこひちとからハちうま

道 島

玉

かきつねの結うこもやよひより
松葉まうらのそくし

玉

堀川院面看

金波の藻より

玉うゝあゝきゝゝ人城意也
色葉和難と云

色ようつゝと玉ふ石を子玉ハほむる詞之方

い
ち
と
う
は

月
15
日

景行紀云十二年次于拍岐大野其野有

石長六尺ナナ廣三尺ナナ厚一尺五寸ナナ天皇祈之ウタヒテ曰朕

得滅土蛛蜘蛛者將蹶茲石如拍葉而舉焉因蹶

之則如柏上大虛故号其石曰蹈石ホミシ

ほむといふ是なりといふ、
玉かゝたる石城かゝる

もつとほのゝとれぬゝよりふくむへ

○いくに 日本紀忘神天皇御記 2

ちのいゝとよき
新日本紀云く百八石也いハ

助語云といふ

○みなむろ
袖中抄いなる糸下ゝ水の下の

石城子

破

○
なを
武烈天皇歌
之^ニ褒^ホ世^セ能^ネ
叙云
也
儼^イ鳴^{ナリ}哩^リ鳴^{ナリ}

師說謂畧破也

△
神祇

天神

○あや川やう
和名 鈿天神
和名安万
夜之呂

地神

○くまやろ
地神^ラ田祇^ト
夜之呂久尔豆

天一神

和名鈿云天女之化身也云源氏云

これよりいふ所の神のうちよりいふ所の神は
その神の有力なることよりいふ所の神は
その神の神長神而設なり

○一板めくると神 金葉集より 一板めく
そのかゝる神は事れかゝる人 色
紫和羅より王相として一板めくはあめくこのよ
神といふ大和物語よりいふ事なり
神は一板めくると神といふ天の神のま
はるごとくといふ天の天上といふ其さなり
日と云

山神 ○わらうと 神代紀海神等号少童命山神等号

山祇

海神 ○つとみれ命 三つとはるもふ事集より

神のまゝに玉と云

水神 ○みづめ 神代紀生水神象岡女

○みつち 和名鉄云水神 和名鉄云

○水ぬい 年中行事歌合

天をれと云ふは水の神よりいふ事なり

七神 ○はよ乃姫 神代紀生土神埴山姫

○もにやす 同書より埴安神

火神 ○かぐつち 同紀火神軻遇突智より今俗物の集

臭さかるといふは神の名よりなるべし

くさねといふも同一

○ほのむすひ 又云生火ホムスヒ産靈為子所集

道祖神○さへれ神 和名欽云風俗通云共工氏之子好遠

遊故其死後以爲祖和名佐倍乃加義

○ひきもれ神 やえ集あひまうなる人れ物へりぬ

さなるもて けふもかへらん時あまのひきもれ

とけいのきとを思ふ 玄旨云ひきもれ神道祖神云

道神 ○たむけれ神 和名欽云ゆふ祐田たむけ

「天孫思ふふ心をうへぬへきたむけれ神といふも

○ちふりれ神 ちふれとて道とす神云 やえ歌云

「りかふかへん時あまのひきもれ神といふも

けねふ心ほへ道とすトよむと姓氏録云道守氏有

よきとへ海海よりよむト 土佐日記云

「りかふかへん時あまのひきもれ神といふも

本神 ○くけれ神 神紀本神号句句廻馳チ

「十五番番奇合 くれちの神もくけいになれあふさくれ花とさうく

産靈ワスナ ○むさふの神 奥儀抄云むさふの神ハうふの神なり

産靈と書リ云 和名抄産靈無順比乃加義と有り拾遺集

「るしむさふの神もくけいになれあふさくれ花とさうく

けねふ心ほへ道とすトよむと姓氏録云道守氏有

よきとへ海海よりよむト 土佐日記云

形代カタシロ ○もろへる 宗祇云

一宮川よりおや山田のちりき

△人倫

山洞

こたの山 莊子曰 藐姑射山有神人居焉 仙
洞と稱するようきういふなり 拾送通事

万代とせきハカミはまたのむまはるの山のきうく

よもきう洞 是又仙とされ多く朗詠蓬萊洞

月照霜中又へき

○たうれ舟 童蒙抄より 天位のを載を今從ぬ
きと太上天皇をむすたふりき 仙吉の神
もきうと思ふ人むきき我うてきし後
拾送後三条院御案へて後ほとなくかきききき

は同よりきうきうきうきうきう

春宮

あききき 春を青帝青律なりといふがきききき

仲哥未幼

親王

かきき池

枝乃花 此花非是人間種 瓊樹枝頭第一花 此句の
ききききき

○斗の星 漢武帝に御子梁孝王に斗の星よりか

くききといふ夫木集より 年経強きききき斗の

星のうきききききききききききききききき

中宮

表探 秋のま 拾芥抄より 中宮長秋宮より 夫木

かきききききききききききききききき

右

しるすのち

能国
そへてあそ

大臣

かけなひく 夫ふ かけなひくこまのちのう

お花お日さしあやうそあり

おほぬく

ほの階

階恐ハ位の字を誤ちうん夫未集

大臣は 代てそかけなひくほの位のな

かさうゆうん末もるうに

公卿

おろのち ものち同ーあまのち

民部

民の宮

宰相

やくらのつうき ハ座職

○もろゆき 縁佐抄

中將

○三笠山 奥儀抄中小將といふつう馬内侍集

云々海のそける人かきふとく人きうて後中お

かきふとく人きうて後中お

けしやて三つあふふふふ

三位

重家集二刑部を二位しうりふひつ

うはし けしやてさうりへさるなまきうねも位

けしやてさうりへさるなまきうねも位

四位

むすねの社 是れ社ハ四位の袍ふあふふ

う衣服令深紫二位浅紫二三位深紅四位 装束拾要云

正暦己未四位の袍ふ紫をふく入藻一三三位

月 卦

六位

此袍より上位の人より三位の袍を用やうとな
 きう是遠き始なりといふ或人云一位已
 下四位以上操と名付一極より其色此袍は
 せくる是深きの色ハ意よりちうにあらう
 今ハ官の尊卑袍の地紋にあつた事なるぬ
 きと其より位より上位に上れ急せる袍を
 さして其の神といふ事秘なるべし
 此ハ一は後拾遺より「さきさきかゝるとおも
 をたうたきくやうなるまじはの神」是若
 三位四位より三位より加階せざる
 みより此神衣服令深緑六位は源氏と女
 又夕霧六位より辰上のみとあはれさるる上
 より下なるなり

大夫 隼人

いぬ人 神代卷云是以火酢苾命苗裔諸隼
 等至今不離天皇官墻之傍代々吠狗而奉事者
 也隼人禁外門の警固なる外門は洞の約太
 あつ大嘗會此日ハ其傍より其大吠此声を
 ともといふされハ大人といふもへー延喜式に詳なり

左右近衛中将

○師綱み 一書云左右近衛中将は師
 綱みといふ帝王出師の時師階此左右より仕
 奉るなり 教へ此師綱此を引つてとむ

左右衛門

御階に居るそのやけさ
あまのくるかこ

みうねもて 左右衛門ハ禁裏の御門と云ふ

左右兵衛

かきもろと云宮門ハ筑地といひ此名有るなり
かハ本 法が納言かハ本云法務とい
そうなといふ人もさういふ 綺語抄云

かハ本の森のあうさうとてふものいふか
是新田部貞範自兵衛府生遷任近衛将之時
の歌なりき

侍従

民

いぢくゆき いぢくゆき
いぢくゆき いぢくゆき

いぢくゆきといふをさけしをいふなり
えあふ人定ぬふへ

たひいか

仙源抄云氏なり 抄紙云た

こいかにて有やうきとていふなり
かきもろねのふきとていふなり

いぢくゆき 法明抄云かきもろハ後守人き又云い

系ハ釋多き

日性

たほんたう 是日本紀の訓なり 万葉云

いぢくゆきといふなり 有あつちれさなり

いぢくゆきといふ

いぢくゆきといふ 万葉丹花集云帝王なり

参る詞と心得へし俊頼仲實清輔よその之
遠きところ得遠ひ有とゆきとよく
くかうへ用よとハさねくもふなり

ハ
ヤ
シ
ヨ
リ
ノ

あ
う
く
さ

ハや妻の下のおて一從義妻なりと

三ノ塩 塩草云 ありきとハ常ハ素戔乃命

いふ丈書と云といふ又婦を月うの事とい

今按中記ハ一記江ノ

是八仁賢記六年秋九月○有女人居于難波

御津哭之曰弱草吾夫何怜矣自注言弱草謂

古者以弱草喻夫婦故以弱草為夫

は夫婦ふたふとあるを夫婦とも通して

とまゝに又万葉みち春草春菜青草など書

あうまめつゝねうき書も解るゝ

毒權八

多々々

前夫

○土弓城 和名欽顏氏云前夫和名之太乎

後夫

○ 3 八 在 同 云 後 夫 和名字
波乎

妻

たまうつゝ
歌
昭
云
玉
う
は
ま
と
ふ
妻
成
参
て

清浦朝臣も妻のかまをぬようぞ

不泌注云
玉猪同あまゝあをきた

うあへるすえんあもかくきさる

法乙

前妻

○
乙
子

神武紀歌曰佐夜離助寄也語佐

後妻

周コナミカ奈ナ淋ミ餓カ妻妻謂謂前

宇ウハナリ破ナ奈ナ利リ餓カ妻妻謂謂後

上下畧已上

秋紀注和名欽同契冲沙云後妻於上鳴
鳴喧之儀前妻浮小浪云言無音と云大和物
語よけうハなるこなとひと日一夜よろつた事
いひかゝるゑと云

野ノ中清水ミヅと云の妻成ふと云

能因縁之古今いふへの世中の清水と云

妻夫
○もむなめ 文字集畧云非正嫡故以接為称和
名平無奈女と云

○めしうと 大和物語云さいと君の侍いもうと
伊勢の守うといまをかりうと云う侍もとよかとの

めしうとめきて有る侍は名のせうと云
いも君ハ君ひくもむよなる有るもと云 蜻蛉

日記よをのまれめしうと云 源氏小雲うも又
えと云

夫と捨らるる

○かひ 童謡抄云有 仲實哥 久うるかひ
もつとハいふるをわしけれなく白根越きと

我
○もぬけぬ 月け

今落月ぬしうと云古傳のあきと云 弟ハ

あめうらうらうもももも春の雪ふぬけのほろもめて
いふと云ふはあしき事いふと云ふはあしき事いふと云ふはあしき事

兄弟

ひるはるよりそひめつねのそとえんやうけくまよ
はるなまき枝 かみ川とそと

○なまき枝 言塵集

○いろね 兄河子日本記うめ

○いろと 身をいふ右の同女弟とも

嫡子

○たほい子 大和物語上大膳のうま公平お娘は
たれあゝのふ所入位々おないこはまのえまか將
のどとむてきあひうま 注云太子のいれ姉は

沖子

○なうち 継継紀云坂田大跨王女曰廣媛 生三
女長曰神前皇女沖曰茨田皇女云 万十四かん
ちつとけなうちやうとむじむとやうなうちハ三人

有申子あり

孫

○むなこ 萬葉集北 おむろよんとひてむあこ
より 契沖云 万とて通てむまこと

従父兄 筭い

姑

さくはめ 匡房の説き 海樞集
今あといひけり強きうき侍ふけりきりあれ

としはるハ老若の女よりてり

親族

ひろねゆ ○くえんそく 眷族之變化をへんくえん
ひとぞう 一族 注云こころ孫氏より

○けーやく 外戚をいふ 注云けい

老人

はふさめ 八雲所抄ふいづるけり

○をぢ 神代卷老翁ヲヂと云ふも兼集十 七 といふれを

ちうそけ日と云ふ

老女

○たうめ 車持字を用源順太宰守尊之古語之今呼老女為太宰女

童

ハチ ないこ あけよれ

和名鈿髻髪宇奈

謂童子無髪

総角安本

結

髪也云 万葉童子童女もうなることあり

千種よりなること十二三といふあもまたハチに
とちうれを

○めぢ 照後童女ハチ といふ國のたつこの

僧

能因 かうな

濱の貝ひらけ土のあきれをとなせ

かうな 能因の歌枕にかうなといふハチに

のう文字なるうきま忌部は僧徒か

なりへる能因 うきまへる のうのか

夫木 世のうねのあきれをむき佛をいじれ

能因 たてしな

秘蔵 かとあき

くまのからむのうき根うかうはまのうき

そめかくで 秘蔵おそめかくもつと

も能きまよ ちうれあきぬ山をそめ

こねつとをうやなせ

山ハチ 古事記執哥曰岐券賀由岐氣那賀久

拙人

盗人

那里奴夜磨多豆能^{ナリヌヤマタツ}自注云山多豆者是今

能

盗木者也^ミ

鳳四年數万人緑林山中^ミかくまて盗竊を

せし^ミ盗賊名となさる^ミ長明

能

白波賊^ミよおる事人のしれま

能

是ハ横^ミ首^ミ成^ミぬ^ミと^ミさ^ミき^ミ一^ミ更^ミれ^ミよ^ミめ^ミる^ミ著^ミ聞^ミ集^ミに

能

く^ミう^ミた^ミら^ミく^ミう^ミた^ミら^ミ昔^ミ盗^ミ人^ミと^ミふ^ミて^ミ湯^ミよ^ミる

能

と^ミ入^ミさ^ミせ^ミる^ミ事^ミを^ミい^ミへ^ミる^ミあ^ミら^ミが^ミハ^ミま^ミの^ミ名^ミ

能

く^ミう^ミた^ミら^ミハ^ミ盗^ミ人^ミの^ミ事^ミ云^ミ此^ミ説^ミ大^ミニ^ミ非^ミる^ミ

能

允^ミ恭^ミ紀^ミ云^ミ四^ミ年^ミ秋^ミ九^ミ月^ミ〇^ミ諸^ミ氏^ミ姓^ミ人^ミ等^ミ沐^ミ浴^ミ齋^ミ

能

戒^ミ各^ミ為^ミ盟^ミ神^ミ探^ミ湯^ミ則^ミ於^ミ味^ミ檀^ミ丘^ミ之^ミ辞^ミ禍^ミ戸^ミ岬^ミ半^ミ

能

探^ミ湯^ミ瓮^ミ而^ミ引^ミ諸^ミ人^ミ今^ミ赴^ミ日^ミ得^ミ實^ミ則^ミ全^ミ偽^ミ者^ミ必^ミ害^ミ

能

然^ミハ^ミ姓^ミ氏^ミを^ミ一^ミ終^ミる^ミ盗^ミ賊^ミれ^ミ事^ミ云^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

能

あ^ミら^ミる^ミさ^ミき^ミハ^ミく^ミが^ミら^ミと^ミハ^ミ探^ミ湯^ミの^ミ事^ミ云^ミあ^ミら^ミる^ミ

海人

毒撰石見

あゝな

卷一

ハセニ本
優制云々

卷五

くろ
かづ
さめ

八雲吳本
九一白曰

扣名鉉本朝式曰伊

勢國等潛女 和名加豆岐采 うつほ吹上せふあふうき

め突してよきもぬかつくせと云ふ

漢公羽

○むささび

和名欽曰渙翁

岐無
券良

うはか吹上り

むろろろめてあろひせなとろ

夫木集

田中 ちゅうのむろこよあちやくよす川 細代木よりそ

そとちと

スマフ 相撲

○ちうあをせ

山家集

長月ちちあやせ

よかちふるあゝをうぬはよくたのしめて
是ハ矣

是八矣

名をあらねとさふいと
ふへたを七文字といふ

支分三時用个

獵師

秘
孔

三人

秘藏抄 家持

子明人々々々主

一 城守とていふは中工とていふなり

團人

奥美 まゆとーめ 催馬樂よ ろろくさやううへまゆ

屠

とーめき 形取云やーとふこーハ老若女よ
りうりてとふといふもくさやうてとてふハ老と

屠

○恵とー 源順云 殺生及屠牛馬肉取賣者也

和名惠 止利 今云恵とハ恵とーハ此指あるへー

乳母

○ちおる 辨色立成云 姪母 和名知 於生 今按此乳母也

○ちぬー うはふたこころ此をよ彼おとくハ此ち

ぬーれむさめあやとてとて

○ちり 万十二 くらーくり老よりるうなふせこ

りやむちとふゆうよりとの

○ま 源氏蓮生かまれの語ひおさし事とていふを余持ふれ

とみおちへくといふとて

○つふね 和名鉄云 奴 和名豆 布祓

○まうとち 古事紀云 豊玉毘賣之從婢

おほよそる 源氏蓮生云 おほよそるくづつのみ名

「おほよそるおほよそるいさう月夜とあまをさされあうくたう

今按此哥夫木葉よりいへばおほよそる也傀儡は其名ふ

うさぬおほよそるハ鳥羽美名也 通 くらハ取れぬ女

ふまハかき月夜鳥ふたそるハ力取とあまハされあふと

ハよめたう強く傀儡の美名といふハいづさぬあつ考

遊女

○ううきめ 漢語抄云 遊行女兒 和名守 又云阿曾 又云宜遊行

○あろひ

謂之遊女待夜而發其淫奔者謂之

○やほち

夜發俗云夜保知六百番哥合

うかき免れうきそてはうき旅やうきとてたかき免れうき

信吉物語は川尻をさね八あそびとて那よけとて

○うき妻

徒子我妻とて一板あふはあそび人のうき妻い

ふひうきをたぬるあそび

○たちきめ

六百番歌合波のうきうれこるにやあそ

お人よとちきめあそ

○あろけ

同云合「誰とたさうたのあそびあそびる

思へとけき恨まうら

此歌左方難云あそび子本歌朗咏集抱女のあそび入れと

ひとよ遊女と用事あそび判者俊成卿云公任卿

ほとん先達神歌よ遊女のあそびとて不用事誰人うきと

流入

○新嶋守ニホシマモリ

もろはるる新嶋守流人のあそびうき後鳥

羽院御製「あそびハハ新嶋守あそびのあそびは波風こころとて

此御製より新嶋守といへる流人の事ふあそびるあそび

あそび小あそびあそびるト云句ふ宗祇り年か小あ

あそびあそびたのあそびト付くあそび獄令云元流移人至配

所六載以後聴仕モリカ句意此後追考万葉第七令

年去新嶋守之麻衣扇乃間乱者誰取見とあそ

はあそびあそびとハ吳國の寇賊防人あ兵衛はくへはあそ

彼をたを守らせしあそびをいふと然ハ流人のあそびうきと

かゝる歌よ帝は宮に於て成りて帝とよひる
より又帝中將といふとき一説阿保親王の五男なりといふ

緒嗣大臣ヲツグ○山本大臣 江談抄云緒嗣大臣家在法住寺北邊瓦坂

東仍号山本大臣也ト云

惟成弁ニレナリ○魚田弁タナキノ 称惟成弁云魚田弁初令刈禁裏之田并西京

朱雀門京中等田之故也

源道濟ミチナリ○船路君フナチ 此人不腹立之時甚以優也而性惡人也仍不

可向之船路者天氣和順之日甚以優也風波惡之眩
人不可堪之故称船路君

藤隆光タカミツ○大法會師子 号大法會師子者其躰極有威儀

無心情故称也日上江談抄

濟時大將ナリトホ○空辨大將クウハナヒ 又云紅梅大將 古言談云濟時

大將女子女御后々テント申サレケルヲ款許
アルソト存無左右下度上被拜興平然而無立
后ト仍空辨大將世人云ケリ而不知案内之人
紅梅知也ト云

冷泉院女二宮

○火の宮 榮花後山云云 云云此所いふうと

此女二宮よりいふと云々
けりといふ火の宮と世人云ひたり云々

藤原頼忠ヨリタタ公女尊子

○素^ス腹^ハ后^ノ 葉花物語^ハ山^ノと云^フ 一^ニ流^ル子^ハおも^ハを

る女^メ流^ル哉^カおも^ハな^リう^キかく^シ流^ル子^ハおも^ハを^ハ女^メ流^ル
能^レ后^ノよ^リあ^ハ流^ルひ^ハぬ^ル事^ハや^ハそ^ノの^ハぬ^ル事^ハよ^リそ^ノ人^ハな^リや
と^リて^ハさ^ハさ^ハる^ハ能^レ后^ノと^モ申^スま^シける^ハ云^フ

信義^{シンギ}

○双^{サウ}調^{テウ}君^{キミ} 信義^{シンギ}ハ博^{ハク}雅^ヤ三^{サン}位^イの子^ハなり式^{シキ}ア^ハ々^々云^フ

管^{カン}弦^{ケン}者^ハ伶^{レイ}人^ニホ^シ哉^カ寧^ネ一^ニて^ハ河^カ陽^{ヤウ}よ^リ橋^{キョウ}ひ^ハぬ^ル事^ハ
よ^リ明^{メイ}月^{ゲツ}能^レ夜^ヤ曉^{キョウ}よ^リ能^レと^モて^ハ河^カ務^ム不^フた^リう^キち^ハ双^{サウ}
調^{テウ}能^レ調^{テウ}子^ハ哉^カ吹^フて^ハ過^スる^ハ舟^{フネ}あ^リう^キそ^ノあ^ハや^ハう^キま^シり
近^{キン}は^ハく^シ哉^カ夢^ムよ^リも^トと^モ神^{カミ}よ^リ唱^{ナゲ}う^キら^ハう^キあ^ハれ^ハよ^リ
能^レあ^ハさ^ハ笛^{フエ}之^ハ誰^{タレ}人^ニあ^リう^キん^ハと^モあ^ハや^ハう^キあ^ハを^ハ
ひ^ハあ^ハる^ハよ^リあ^ハ六^{ロク}霧^キよ^リあ^ハう^キま^シて^ハと^モと^モう^キち^ハ

ひの音^ネ斗^トす^ハへ^ハと^モて^ハ又^{マタ}あ^リち^ハふ^ハ村^{ムラ}親^{シン}王^{オウ}流^ルま^シり
と^モ同^{ドウ}ぬ^ハひ^ハら^ハき^ハを^ハ信^{シン}義^ギと^モ名^ナあ^ハう^キら^ハう^キと^モ感^{カン}
能^レあ^ハさ^ハへ^ハも^ハ双^{サウ}調^{テウ}能^レあ^ハう^キら^ハう^キと^モ宣^{セン}せ^ハら^ハう^キそ^ノれ
う^キり^ハ天^{テン}下^カ皆^ハ双^{サウ}調^{テウ}能^レあ^ハう^キら^ハう^キと^モ号^{ガウ}し^ハら^ハう^キ

弘法大師

○五^ゴ字^ジ和^ワ尚^{ショウ} 弘^{コウ}法^{ホフ}大^{ダイ}師^シハ^ハ字^ジ哉^カは^ハよく^ハと^モ左^サ右^ウの^ハの^ハ
よ^リ持^チた^ハ衣^イの^ハ是^シよ^リは^ハき^ハう^キて^ハ志^シ業^{ゲツ}の^ハ字^ジ哉^カす^ハれ^ハと^モ
と^モさ^ハて^ハと^モあ^ハる^ハと^モり^ハら^ハう^キと^モや^ハこ^ハ上^{ジョウ}著^{ショ}聞^{ブン}集^{シュ}

永^{エイ}縁^{エン}僧^{ソウ}正^{セイ}

○初^ソ音^{オン}僧^{ソウ}正^{セイ} 初^ソ音^{オン}僧^{ソウ}正^{セイ}ハ^ハめ^メは^ハう^キけ^ケさ^ハう^キ郭^{カク}云^フい^ハつ^ハ初^ソ
考^{コウ}れ^ハん^ハ地^チこ^ハと^モき^ハこ^ハ此^{コノ}歌^カよ^リう^キて^ハ初^ソ音^{オン}僧^{ソウ}正^{セイ}と^モ

又名やうきうき

圓^{ニカ}嘉阿闍梨

○はまねたけり雲糸 けうとなうんこととかなりき

といふ句よ 山からけはまねたよきうき雲糸といふとき

らきうきうきの人にはまねたけり雲糸といふとき

此人俊成々同時の人なり已上曉筆記

高松宰相公定^{キンサダ}

○無月宰相 白河院於多相殿九月十二夜歌池

上月此時高松宰相公定無月歌池詠をその人

称多内宰相ヨ

兵衛佐顯仲^{アキナカ}

○かみきとけき法佐 歌仲歌長き法佐なりき

村田河院師會よ 柳原池水といふ歌よき

かみきとけ池もきやうよみゆるきなるの柳原池よ

きやうきと けきとと換せきやうきとてき人

かみきとけき法佐と号を件け池水なりき

うて範永等池よとい井の位きよなりきよき

けきとけきと已上帝草紙

徳大寺左大臣實定^{サササタ}

○名なりの大將 無明け酒成名もなりき酒とよ

きやうきとけきとけきの大將といふきとけき

俊成卿○なるきけ入道 俊成々けは道けき考めてい

まゝにう富士にたつに成たるとよみてなる
ちか入道名あり大將とほりて人よあきあひ
しとて已上無名秋

行成卿○こまなのちうゆま け成の他名枕草まゆ
書式ア○日本紀局 紫日記云さるも其肉はといふ人あ

やうきとらふようきとらふ思ひるるる志
まゆにころうに記さうことのおちりまへは
しとてうへ源氏に物語人うのませぬひつさ
こーめーるふは人ハ日本紀をこそよみ終へけ
きまらふとよきえ有りと其こまをせらる成れと
おまらふといふなんささういふと最上人なると
よいとちて日本紀の局とをほけさうなること
をうくそはるとま

法橋實賢

○ひきうへる 今物語云々實賢ハ小侍従う子なり
いうまうらる事うそは人なりきうへると名付たり
んれ又法眼かきやう

法の橋に下る年ぬひきさる今ひといふるに能はう
もやと申たうらきハやうたさきよりうま

重盛

○燈籠のおと 平家物語云東山の麓に四十八箇の
燈籠を建一間より四十八の燈籠をかけしを
こりらきハこはとて城燈籠のおとと申る云

季仲

○こくそつ 同書大宰權師季仲之余りよきお

孝善

○まはつ 傳孝紙云右海つ尉孝善ハ号まはつ
まはつあつて思師まはつより記對之

小侍従命婦

○溪萩の侍従

神中抄云後拾遺記低者小侍従

令婦ハ溪萩の侍従と云々補叙ウ猶子なる

なりと云々低者記云加賀守正定女入道二

ホ云女房云今案云後拾遺十「ちきそこと

かまうりなきも山まへつるなきれり

いづへのなき本もりの若う代もはきとてある

女將俊明

大目女將 十訓抄云俊明ハ人々何事もな

うさうりなきと大目女將と云々いふさうと云々

強信々同時の人なり

津守國基

後拾遺集云「うさうさ云々加々西事

と云々ゆさうさ云々あつて云々云々云々此秀歌

みよめて云々傳て云々云々の神と云々といへ

袋草紙云云於或介とテ人々歌讀云右衛門

尉孝善詠云 ウクヒスノハツ子ヤナニノ色ナ

神主祐茂

ラ... 神の國墓有此座已秀歌被讀之
由存不安其後不食戒無他事業和哥叔少ス
スニニカクタマツサトミユルカナト云歌
ハ讀ナリ人々寝譽ス仍散遺恨云畧

漢ふ香能神主 春日言宮の神主祐茂とい
人慢又也き一記人よて集集の有る比
和歌の漢ふ能言けさう漢ふ香人よて
高城のうてさく とうて櫓ノ入るさくハ漢
ふ香能神主といひけり
右古人の良名といふるよさうなる良名

傳正成授本能傳正又ハ切松能傳正も堀江
能傳正もいひ信濃市目行長を五徳冠者
良名せハ徒然草よき縁者の小能徒物ハ
能傳人ハ系物語うさう紫の加賀
十訓抄よ裁りさう
又和歌の言又王う 澤四能知河 源聖の
慶運 漢江能傳并 能知兼好 良名
せハ
カハハ漢江能傳正不き贈のあさう河能知河 能阿
唐鑑よの能知のさやあるさうさうさく 其さ
漢江のあさうさうのさやあるさうさく 浦内を吹 能并

佛

「枕の畔へのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ
「な」
「是れおのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

○西にありて 教主阿弥佛のふとてう夫木ま

「ふ」
「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

能留

かくたも 奥を抄る存撰式おのれをみせし

「かくたも」
「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

能留

なとくらも

眞傳

「自然山を」
「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

「おのれのおもひの事結ぶるはなは」
「はのこころを」兼ぬ

小腹

○こけうと

和名抄

小腹

俗云はうと

ちうとハ陰上の畧

指

○および

同書訓俗云大指と指とへうと大

指ハ才ホ才ヨととりやうと

腕

○たむき

同前

○たふさ

後撰集

折つゝとたふさふと

脇

○よびろ

和名欽云脇曲中也

うつほ物語は髪ハよろほちかうとていふ

蹴

○あなひ

同書訓

蹴

○あなう

同前

月水

さう

同前風雅集と和泉式ア能く

はるよとわうとて奉幣かなとさうりふとて

咽やらぬ身けうにさのたふとてさうりふ

アとなうとさうりふ

秘中

身をしる雨

風雅集

閑くとおるハ

ちうねとぬ身けうにさのたふとてさうりふ

日

空とぬ雨

後撰集

ちうねとぬ身けうにさのたふとてさうりふ

龍溪のさのたふとてさうりふ

疾

思ひ川

時^{おほ}あらし

わやまきるまを

なけきおきう は夜露^日塩^はまほきうなけきお

こころを歎息^{こころ}二万十五 こころを

ちなけくしとまりませ又あきらみい

吹せハとともるなけおのこころをあきらめ

成 是等よまうへおきその風おとえ合を

へ

やとま 齋宮忌詞云病 夜須羨

瘰^と

○まもくら 蜻蛉日記よ云 屋おうへおきい

とまろしあらしへよへのまをこたらし

くらきしなうんとてまはくもいとあきらめなり

と和名録云瘰^{和名}并色立成云^{之毛}手足中寒作

瘰也^{今案}よヒミハ俗云ヒヤまもくらハ

俗云瘰^瘰或云まやけ袂衣よを雪やけと

もいへう

脚氣^{カッケ}

○かくひやう うはな暖味院まよきいさつひは

かくひやうといふまのおうろく源氏若菜もまきい

まひはみろかくひやうといふまのふせくあうろく

ひはうてまうろくあうろく事もゆきまははか納室

まやまひらむのまきけあひけといへう 和名

鈹脚氣一云脚病俗云阿之乃介

そハ穂^ホとて穀穂^{コホ}のあてが
腋^{ヨク}より生^ナかす

○あゝと云々。又云と云々。和名欽訓

○土以叔
和名訓

○かきり
同云面皮上_ニ有_{カス}滓是也

○
く
く
同前

○わろ
や
之

え
や
之

源氏若葉堂
己

やゝとくくくくくくくくくくくくくくく

まんじやうせぬとく 和名 欽廬 俗云衣

○あうりうさ
栄花物語三月の空より今年

俗云衣
夜弄

ハあうもうきといふもいふて上^も中^か下^下やう

能

皇今所謂はうたう此病長徳能比上全略々

疫行せしを毒考予別記又有

○もづせ 續日本紀云天平七年閏十一月壬寅

是歲不稔ミソラ自夏至冬天下患豌豆瘡俗曰袁瘡ノ

俗日
震癘

○をなす大鏡第五云は水のうゝハ字をう

うちはさそでわうちがけたるものをあげる

○つぎ
源氏横笛をよつてゐる志あるものと



Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of Latin and Japanese characters, arranged in several lines. The text is written in dark ink on aged, slightly stained paper.

觀
藏

